

宇治川の先陣 (第三話)

真夏の太陽がキラキラと照りつけて灼きつく様な暑さに生気を殺がれる様な毎日が続く、例年ならば生田神社も楠公さんも長田神社も夏祭りで神戸全市が湧き返る頃だが今年火の消えた様に淋しい。そして朝日新聞の全国中等学校野球大会も取り止めた。人々はやり場の無い不安といらだちの中に徒らに神経を高ぶらせて行く、砂を噛む様な大正七年八月であった。この夏、北陸に起きた火の手が燎原を吹き抜けて日本国中のあちこちに衝撃的な暴動旋風を巻き起して行った。そして遂に鈴木商店にも運命的な八月十二日の夜が襲いかかって来た、一瞬にして灰燼に帰した本店の全機能！一面の焦土と化した東川崎町宇治川の一廓！世に云う米騒動のクライマックスである、私は観念的に「米騒動」と云う言葉が好きになれない、この言葉の持つニュアンスは私等に取って憤怒と坐折感以外の何物でもない、茲ではその事にふれるのは本旨

でなくこれから書くこととする事は、その直後の目を見張る様な本店機能の迅速な陣立てと世論をはね返す様な快進撃に移る迄の一寸した空白時のエピソードの点描である、ノン、フィクションと云い度いが正確な資料がある訳でなく狭い視野の中から記憶を引き出したに過ぎない事をお断りしておく。

罹災の翌日から早くも建設の鉄入れが始まった瓦礫を取り除かれやり方が打ち込まれてまたたく間に基礎が敷かれた、文字通り昼夜兼行で見える内に建家が建ち上つて行く、憤りをぶちまける様な工事部全員の働きぶりが神戸っ子の度膽を抜いた、この頃の事であろうあの有名なロンドンの高畑さんから「慶賀に堪えず」と云う電報が届いたのを金子さんはボンと膝をたたいて「我が意を得たり」と喜ばれたと云う、これは神話ではない。伝説でもない、肝膽相通する両雄の恐らく緊迫した心の片すみの絆縛たる余裕のあらわれであったと思われる。後は高畑さんの予見通り「焼け太り」が着々と実

現されるに及んで之は逸話中の逸話として永く語り伝えられて行く事である。そうした首脳部の期待に答えて工事はぐんぐん進む鈴木商店に取って今空白程恐ろしいものはない、焼失した建物も器材もこうなってしまうへば物の数ではない。只、不覚にも土気の沮喪する事と手をつかねて暇を持てあます事が一番こわい。寸時も早くこの忌しい出来事を乗り越えて再び商戦に躍躍する事こそ刻下の急務であった。幸にこれ等の杞憂は霧の如く吹き飛んで僅か十二日間に新しい本店の建物拠点が竣工した。我々は茲に高らかに関の声を揚げて陣容を結集し懸河の如き武者押しを天下に誇示した。宇治川は時ならぬどよめきに出陣の前振の様相を呈した。八月廿四日の事である。神戸新聞と又新日報は筆を揃えて、「宇治川の焼け跡に、鈴木商店は仮建築乍ら十二日間で営業所を新設し流石に気の早い神戸っ子もアツと目を見張った……」と書いて居る。神戸新聞社は本店の斜向いになり、同じ時に側杖を食って焼失罹災したが一早く新聞は刊行して居た。一連托生的な好意と思いやりがあつたのかもしれない。

帳簿のない事業部は手足をまがれたも同然で初めの意気込みも何所えやらよん所なく手をつかねて時を待った。私の所属した保険部は栄町三丁目の東京海上神戸支店に居候する事になり提供された応接室の入口に鈴木商店保険部と書いて張りつけた。御大の横山さんと村井順三、小串牛蔵と私の四人世帯である。本店では最も小人数の部で焼ける前迄は船舶部と同居して居た陶山武之助、荒木忠雄、田中寿一、住田正一の諸氏は直接の上司と同様であった。小人数と雖も横山さんは並居る主任さんの中でも先輩格で仲々見識が高く親方の威光で私は肩身が広がった。東京海上の支店長小菅金造氏は横山さんと一ツ橋の同窓で今でも九十才を過ぎて尚壮健西宮に御在任と聞く、横山さんは保険学科を専攻した神戸損保界の権威、日の出の勢の鈴木商店の保険契約を一手に握る大御所として各社の保険部への出入りはずさまじいものがあった。後の文部大臣で甲南大学の創設者平生飢三郎氏は当時東京海上の専務で罹災の直後急馳西下横山さんの介添えで西川さんや森さんに御見舞を述べられた。我が部にも町重な陣中見舞の手土産を頂いたが私はこの時生れて初

山城の国宇治川は天ヶ瀬ダムを擁して末は淀川に合流する水量豊かな一級河川である。摂津神戸の宇治川は市背の山々から流れ出た小流が大倉谷、楠谷を経て暗渠となり元町六丁目から海へ注いで行く。川とは名ばかりだが昔元町六丁目には宇治川と云う市電の停留所があつてこの辺り字名を宇治川と称した。同じ宇治川でも似て非なる物があり呼び方も前者は「うじがわ」と濁音で云うが後者は「うじかわ」とにがらない。それは兎も角、この処で鈴木商店が新しく陣ぶれをした事は、その昔源義経が木曾義仲を破って都を手中に収めた時の儲戦宇治川の先陣争ひにもなぞらへ得る様で興味が深い。御存知、宇治川の合戦は義経の手勢佐々木高綱、梶原景季の両名が宇治橋の破壊されたのを物ともせず、池月、摺墨の名馬を河中に乗り入れて先陣を争ひ、対岸の今井兼平を敗走せしめた話「——寿永三年一月春まだ浅き谷々の氷打ち解けて水は折節増りたり白浪夥しく漲り落ち瀬枕大きに滝鳴りて逆巻く水も早かりけり。平家物語——」とある。神戸は元来、源平両氏にゆかりの歴史が多く、宇治川と云う名の連想もこぢつには違いないが萬更縁の

ない話でもない。

(四)

罹災直後の時点に話を戻す事にする。丸裸のまま焼け出された各事業部は市中の縁故をたどり取りあえず応急の仮事務所を設置した。総本部からの指令、各部門の横の連絡等緊密を要する急務のため事業部はそれぞれ要所所に立てこもり早速と活動を開始した。例えば、相生橋の商業会議所は二、三階の大広間を借り総本部の形で庶務、会計、人事、文書の各部、及中核をなす輸出部が居を占める。船舶部は三上回漕店、鉄材部は神戸製鋼所、製油本部硬化油本部は兵庫魚油工場、倉庫部は葺合の港湾倉庫、燐寸部は東洋マツチ本部雑穀部麦粉部は高浜倉庫等、四十に余る群雄が市内に割拠した。

落ちたが鋼鉄製二階造りの大金庫は厳然として宇治川の一角に健在を誇って居た。本店に取って諸般の原動力とも云うべき重要書類、諸帳簿の一切が格納されその安泰が報ぜられた時は不安が一ぺんにけし飛んだ様な喜びが全店を包んだ。大金庫の内部の広さは各階約十坪余り壁に添うて函丈な柵を造り付け各部のスペースが取り定めてある。手押し丁稚車で毎朝晩帳簿や書類を搬入出するのが私等の重要な仕事の一つであるので私等には特別な関心と愛着があった。その大金庫が開けられないのである。どうしてなのか、折角、灼熱の中で孤塁を死守し本店の生命を守り続けた大金庫がどうして開けられないのか、我々の頭上に大きなあせりが被さってきた。

結局内部にはまだ熱気が充満して居て今直ちに開扉すると外気の酸素を呼んで引火する恐れがあるかもしれぬと云う。引火の恐れがない場合でも急激な気温の変化で紙質に異変が生ずると云う事で一定の冷却期間をおかねばならぬと云う事になった

真夏の事である現今と違って自然にさめるのを待たねばならぬので之は仲々性急な訳には行かぬ事となった

さあ仕事だ！ 愚図愚図して居る訳には行かぬ。と一斉に奮起したのだが、さて茲に困った事が持ち上った。他ならぬ心臓部の大金庫が開かぬのである。本店の建物は全部焼け

居て今直ちに開扉すると外気の酸素を呼んで引火する恐れがあるかもしれぬと云う。引火の恐れがない場合でも急激な気温の変化で紙質に異変が生ずると云う事で一定の冷却期間をおかねばならぬと云う事になった

真夏の事である現今と違って自然にさめるのを待たねばならぬので之は仲々性急な訳には行かぬ事となった

週二回位、勤務の余暇をさいて平日の午後三時を過ぎると主任から許可が出る、教育係で兵庫電車の切符をもらい三々伍々連れ立って行かせてもらおうのである。兵電(今の山陽電鉄)の天神町駅で下車して数分、海浜に面した民家を借り受け「海の家」となつて居る。明け放した縁側から先裁に下りると直ぐ波打ち際で、脱衣場、休憩所としてあつらえ向きの所であった。黒いローリー鉄瓶に「アメ湯」を沢山用意し素朴だが温い気配りが感じられた。勿論教育係から誰かが交替で毎日監督に来て

居る。

宇津木さんは特に面倒見がよくてその上一諸に泳いでくれて上手に指導してくれた。先生は京都の武徳会から来てもらった白山源山郎と云う人でこの人は後に極東オリンピック等でも有名であった。小堀流泳法の師範で仲々精悍な泳法を教えた、小堀流はアフリ足で水面から余り顔を出さず一挙動で抜手をかく剛快な武道流で当時漸く普及し初めた自由型クロールの日本版と思えば大差はない。こんなにも教育係で力を入れてくれた天神浜の海水浴も、今年に限って八月初めから不隠な動きが宣伝されたので海の家も閑散を極め無聊をかこって居たが事変後数日が過ぎて稍人々の気持ちも落ちついた頃、前項で述べた様に大金庫が開かないので余儀なく時間をあます様なプランクが生じた。そんな時、西川支配人から「手の空いて居る者は皆、海水浴にでも行って英気を養って来い」と訓令が出た。海の家はほんの一寸の期間だが、見習員だけでなく中堅の店員等も押しよせ俄に活況を呈した。あり余るエネルギーを発散させてストレスを解消しさわやかな明日への体調造りに大きな役目を果たしたものである。

(七)

小僧仲間の私等や若い店員に取って思わぬバカンスが続いたが、それも束の間の出来事で愈々宇治川の本店へ総結集する日が来た、問題の大金庫は遂々それ迄開かれず八月二十七日の朝専門家数人の手に依って開扉されると云う事になった。市内の各所に散って居た各デパートが一斉に引き上げて来てそれぞれ定められた位置に設営を初めたのは残暑も尚酷しい八月二十五日である、と私の年代譜に記されて居る。以前の華麗な近代建築に比べて平家建の木造スレート葺の応急建築は確に貧弱で見劣りはするが、木の香も新しく、調度品も総て新品揃いで気分一新には効果がある、口の悪いのが二言目にはバラックとけなすが大きさは広さは東川崎町一画を全部占めて居るのだから貫録は充分、しかも前と違って各室個有ではなく大広間雑居の形にならざるを得なくなったのが、却て壯観を呈し且つ多勢が毎日顔を合せる親密紐帯感が広がって行ったの思い合わせると名実共に鈴木商店の家族主義が大きく再認識されて行った。

さて、所定の位置には早くも机、椅子が置き並べてある、主任用は両袖机、総皮張り肘掛けの回転椅子、次席用は馬蹄型曲木の回転椅子、机の天板には色も鮮やかなグリーン色の羅紗を張り、その数何百とも思われるのがづらりと一目に見渡せる、茲に且つての鳳鶏や一騎当千の強者が馬首を揃えて天下に号令したのでから思い出すだけでも血潮が湧く、先づ玄関に公文、松本両氏が坊んさん数名を従えて出入りの人を総てチェックする公文さんは終始和服姿でセルの羽織に紺の前垂れ、愛用の印伝の煙草入れから煙管を取り出してポンポン吸殻をはたいて居た、突き当りが宇野さんの倉庫部、藤川、増田、肥後、伊藤、十河、森氏等三十人近い大世帯、同辰巳会の幹事として貢獻中の畑、松岡両氏の紅顔を思い出す、倉庫部は浪華倉庫の本拠と間違えられるので後に貨物部と改称した。玄関の左隣に出納会計があり松下、芳賀氏の他一時賀集さんが現金と取り組んで居られた。広間は真中に廊下を通しての両側に、東は、樟脳、硬化油、雑穀、輸出、東洋輸出輸出経理、保険、機械、麦粉の各部西は、満州、製油、米、燐寸の各部そしてその端に西川、森の両支配人を擁する支配人室があった。この広間各部の人物往来を書き出して居た

日には紙数が幾らあっても足りないのでは之を項を改める事にする。以前中庭のあった所から西裏にかけて敷地が凸字形になって居る、中央部に当る所に食堂を設けこれに通ずる廊下に添って会計部があり日野さん、大塚さんや河村、武井、佐川の各氏、裏側に当る突出した別棟に鉄材部、造船部、船舶部、が肩を押し合って居る。久はんは鉄材部に育った逸材、南、楓、堀口、草場、谷口、井口、木谷氏等と共に活躍した。ざっと見渡した処目にも絢なる豪華な布陣、水も漏さぬ鉄壁の構えは、東国から疾風枯葉を巻く様に西下した判官義経が笠置大和口から宇治川を望んで布陣し、戦はざるに既にして義仲勢を畏附せしめた故事にも似て心強くも頼もしい、私は判官びいきの一人として武將義経が大好きだが偶然にも宇治川の先陣は義経の運命に大きな変化を齎らし、宇治川の鈴木商店は十年後、同じ様な悲運に遭遇するのだが神ならぬ身のその当時はそんな暗影の片鱗すらもない。後日の事はさて置いて此処から風雲を巻き起し世界を制覇して七つの海にS Z Kの旗印をなびかせて行くのである。

ロンドンでは大金子と呼応して、高畑商法が欧州を席捲し東西両陣営に輝かしい戦績を収めて行く、僅に金子企画の投資部門が香しからず、世上之を評して「鈴木は船(貿易)で儲けて、煙突(工場)で損をして居る」と云わしめた。例え十年後の因子が此処に胚胎して居たとしても金子百年の計は歴史に餐然として輝きその大業を称えるに絶讃を惜しむ人は一人もなからう。

辰、鈴木商店は東川崎町宇治川の陣に黄金期を迎え敢然として全国制覇に乗り出した。大正十一年、海岸通りの新小屋に移る迄の四年余り、湧きに湧いて、儲けに儲けた、五十万円、臨時配当説が飛び出したのもこの頃である。今の価格に直して何程になろうか三千の従業員一人当たり平均二百円近い額は当時としては世上に類例がない、金子さんの夢をつないだ煙突の鬼子は、今、日本のトップ産業として君臨して居る、歴史に咲いた空前の花は何時迄も金子さんの墓前を賑わして行く事だろう。

(第三話完)

## エネルギー資源に想う

飢餓に苦しんでいるのである。

辰巳会全国大会が終ってから数日して突然左胸関節炎を患い十日余り静養するの止むなきに至りました。臥床中新聞・雑誌その他で近頃、エネルギー資源問題が急にクローズアップされて来たことに気がきました。たが年々三・五パーセント増の消費率でもって資源が大量に消費されていった場合一体いつまで資源が確保されるのか、また石油など枯渇してしまわないかといった問題である。エネルギー資源を石炭換算して、現在では三十五、六億トン消費しているものが今世紀の終わりには百九十億トンを使うことになる。こんな調子で二十一世紀に入っていけば、あらゆる埋蔵資源が掘りつくされるだろうと憂慮されるのも当然である。そして、エネルギー資源が先行きかまわず老大な量を消費されるのは物質文明生活の高度化と、それを享受する人口が急激に増えるためでもある。この点では、エネルギー資源よりも食糧問題が焦眉の急であるかも知れない。西暦二千年には世界の人口は倍増するといわれながら、現在世界の半分以上の人口は



西宮関学構内のスケッチ

小川 実 三 郎

この葉書の表に左のことばが書き添えてある。

関学構内を散歩、高等部玄関わきのヒマラヤ杉の葉がぐれに小さな石組みがあるので、よく見たら、計らずも裏面記載の文字を見付けた。小さな石に浅く刻ってあるので、かろうじて読めた。一九五四、一二、八註 西川玉之助氏は関西学院中学部長から日沙商会社長になられた方。久留島武彦氏は世界お伽話を各地に講演された有名な大家であった。